

[学会報告]

シンポジウム

「世界各地の小児研究：拠点における継続的な取り組み」
「エビデンスに基づく栄養改善プロジェクト：今までとこれから」足立 基¹⁾

1) 聖マリア病院国際協力診療部

聖マリア病院（福岡県久留米市）は1982年、カイロ小児病院からの看護師受け入れを皮切に、キリスト教の理念に則り、緊急・開発両面の国際医療協力を続けている。

2004年、NPO法人ISAPH(International Support And Partnership for Health)を設立し、ラオス中部での高い死亡率がビタミンB1欠乏による小児脚気であると特定し、栄養改善の結果、ビタミンB1欠乏症による乳児死亡が殆どなくなった。近年は、ラオス固有の昆虫食文化に注目し、NPO法人食用昆虫科学研究会と協力し、住民が食用昆虫を育てて食することで年間を通して必要な栄養素を摂取できることを目指している。

アフリカ内陸国マラウイでは、約4割の子どもが年齢に比較して低身長が発育阻害と言われ、食の多様性の乏しさが原因と言われている。2013年からJICA草の根技術協力事業で北部ムジンバ県の西端の村で、続いて、その隣のマニャムラで2018年から同じく草の根技術協力プロジェクトを実施した。県病院やヘルスポストのスタッフと共に、ニンジンなど不足している栄養素を補える作物の栽培を住民に奨励（農業介入）、食べたい食材を持ち寄ってもらい、目新しいレシピを紹介、調理し、みんなで食べるクッキングデモンストレーション（調理実習）を行ったところ、対象地域の5歳以下の発育阻害児は37.5%から27.5%に減少、同時に摂取する食材の多様性も増加した。

外部資金が途切れた間もこれらの活動を継続し、2025年からJICA草の根の技協3期目となるプロジェクトを受託、これらの活動をパッケージ化して、自発的な栄養改善手法を周辺に展開することを目指している。ISAPHでは、介入前後の児の栄養状態、食の多様性を客観的に評価し、介入効果をエビデンスとしてJICA、マラウイ政府に提示することで一定の評価を得た。

これらの手法は、社会実装を前提とする介入研究にとって不可欠であるとともに、研究を国際協力活動の中心に据えることで事業を展開する聖マリア病院にとってのインセンティブとなることが期待される。

キーワード：栄養改善、エビデンス、発育阻害、途上国、研究、社会実装